

## 滋賀県近代和風建築総合調査（2）

### 建造物研究室

平成4年度・平成5年度の2ケ年にわたり滋賀県において近代和風建築の調査を行った。平成4年度の地元自治体による1次調査(所在調査)の結果、1451件1665棟がリストアップされ、そのうち141件224棟を抽出し、平成4・5年度に当研究所が2次調査(詳細調査)を実施した。調査成果は『滋賀県の近代和風建築—滋賀県近代和風建築総合調査報告書—』(滋賀県教育委員会1994年3月)として刊行した。

**住宅** 滋賀県の近代の住宅でひときわ目を引くのは文化人の別荘建築である。その代表が、画家山本春挙別荘であった蘆花浅水荘(大津市 大正5年)、画家橋本閑雪別荘であった月心寺(大津市 昭和2年)である。庭園の造形に優れていること、建物は接客を重視し、茶事を強く意識していることが特徴で、施主の趣味・感性をよく反映している。なかでも蘆花浅水荘は大正年間に敷地・建物とも山本春挙の意向を強く取り入れて計画されたもので、建物は正統的な書院、数寄屋趣味の部屋、洋間、アトリエ、持仏堂、茶室などさまざまな要素を兼ね備えており、その端々に春挙の工夫が生かされた県下で比類なき建築である。また、井狩家(近江八幡市 大正3年)、五個荘町歴史民俗資料館(旧藤井家 昭和9年)などの大規模な邸宅では、特に接客空間の豪華さが目を引く。また、近江日野商人館(日野町 昭和11年)は、土間はあるものの変則的な形式をとり、居室部では中廊下をとって、廊下をはさんで和室と洋室を並べており、近世以来の通り土間をもつ形式の発展の到達点というべき建築である。洋風の住宅はヴォーリスの存在が大きく、吉田希男家(近江八幡市 大正2年)は洋風の外観ながら内部に巧みに和風を取り入れた建築である。大正以降は和風建築に洋室を付加もしくは組み込む例が増して、近代住宅の特徴のひとつとなる。

**料亭・旅館** 料亭や旅館については総合的な調査が遅れている。今回の調査でも1次調査で取り上げた件数が少なく、2次調査の対象となったものは、もと料亭を含めて17件に過ぎない。旅館・料亭で注目されるのは、住宅と全く異なった平面形式と豪華な造作、凝った意匠である。

平面形式の特徴としては廊下の充実があげられる。このような商売では当然ながらサービス導線を確保することと、各部屋の独立性を高めることが要求される。明治期の旅館では、2階の階段を昇ったところで板敷の空間をとり、そこを中心に部屋を配する。大正頃になると中廊下を採用するようになり、天理教滋賀教務支庁(もと料亭 大津市 大正頃)では1階でも中廊下によって部屋を並べている。希少な例ではあるが、かつての遊廓のなごりとして部屋をきわめて細かく分けた建築がある(開盛楼 草津市 明治初期)。また、料亭としては大広間をもつ建築も見逃せない。大広間をつくるには、部屋を縦横につないで襖を取り払って広間とするものと、当初より大面積の部屋を計画したものがあある。後者としては天理教滋賀教務支庁がその代表で、幅広い階段、広い階段ホール、ホールの左に便所・配膳室・洋間を備える。広間内は折上天井とし、楽屋付きの舞台があり、まさに劇場を思わせる空間である。3階建ての建築としては兵四楼(近江八幡市 明治中期)・かぎ楼(多賀町 明治19年頃)がある。それぞれ日牟礼八幡神社と多賀大社の参道の最も門前に近い場所に位置し、3階からの眺望がひとつの売物となっており、参道のランドマークともなっている。

意匠面では数寄屋意匠を取り入れた遊び空間の演出をしているのが特徴である。北村義孝家(もと料亭 彦根市 戦前改築・増築)では、土間の片側の壁に屋根付の板塀を貼り付け、対面の居室側に格子を並べ、奥に式台を設けるなど通り土間をひとつの路地にイメージしている。さらに、天井を吹抜けとし、2階廊下から円形のベランダを出し、廊下に面して富士山形の窓を空け、どぎついまでの工夫を凝らして客の興味をそそっている。

**公共建築** 今回調査した公共建築は役所・集会施設・学校・駅舎・その他に分けられる。公共建築は洋風建築・擬洋風建築が多く、これまでもすでに近代建築として調査されている。今回の調査では今までに調査されていない物件や和風の強い建物を主として調査したため、その調査件数は少ない。県下では大規模な和風公共建築が少ないなかで、前回報告した近江八幡ユースホステル（近江八幡市明治42年）は大型和風公共建築としては唯一の遺構である。

学校建築については4件を調査したが、多くは擬洋風の外観である。そのなかで淡海書道文化専門学校（五個荘町 明治末期）は和室の教室がそのまま現在でも使用されており、貴重な遺構である。

駅舎は今後近代化遺産として調査する機会があろうということで今回は2件のみの調査にとどまった。いずれも擬洋風の外観に和風の居室をもった建築である。近江鉄道の駅舎については調査した八日市駅に限らず沿線に戦前の駅舎が数多く残り、設計時の資料（図面）類も揃っており、今後調査および保存・活用の可能性を秘めている。

**商業・事務所建築** 商業・事務所建築は擬洋風建築が多く、また近代になると近江商人の経済活動が京都・大阪等の大都市に移る傾向が強くなり、想像したよりも注目される遺構は少なかった。

**産業建築** 産業にかかわる建築は今後近代化産業遺産の調査との兼ね合いもあり、あまり調査は行わなかった。地場産業の製茶と陶芸に関するもの各1件を調査した。両例とも当時の生産施設を伴った貴重な遺構である。ただし、調査が断片的なので、今後総合的な調査が必要である。

**宗教建築** 宗教建築は社寺に加えて、教会建築、新興宗教建築を調査した。社寺建築では、寺院本堂や神社本殿の多くが、近世以来の伝統を引き継ぐもの、もしくは退化した形式のものが大半で、近代和風建築としての面白味には欠ける。そのなかで建築史学者や修理技師すなわち建築史教育を受けた者による復古調の建築の存在が注目される。向源寺観音堂（高月町 大正7年）は、唐招提寺金堂等の修理にも携わった建築史家土屋純一博士の設計で、中世的な平面構成の仏堂に古代・中世の意匠を散りばめた建築である。また、宝蔵寺弁財天堂は修理技師乾兼松の設計になり、やはり中世建築を基調とした復古的な意匠でまとめている。神社建築としては、戦前に国策神社として創建された神社が注目される。近江神宮（大津市 昭和15年）は紀元2600年を目指して創建された神社で、内務省技師角南隆・谷重男の設計になり、その壮大な殿舎群は明治神宮・平安神宮・樫原神宮と並ぶ傑作である。また、本殿や本堂以外にも社務所・庫裏（書院）や能舞台に質の高い建築がある。

教会建築は大半が擬洋風建築で、多くは近代建築として調査が行われている。そのなかで彦根聖愛教会スミス礼拝堂（彦根市 昭和6年）は外観を向拝付の三間堂風としながら、彫刻等の意匠の題材をキリスト教にとり、内部は全くの教会建築として破綻なく仕上げている優品である。

新興宗教の建築としては天理教と金光教がある。天理教の湖東大教会（八日市市）や甲賀大教会（水口町）などでは、神殿が近代を代表する大規模建築として評価が高く、客殿等の贅を尽くした質の高い殿舎群が注目される。また、大教会は直接宗教に関わる殿舎以外にも、教務者の住宅や宿泊施設や福利施設によって敷地が構成され、ひとつの町を形成していることも注目される。（島田敏男）